

令和5年度

— テーマ・水について考える —

水の週間記念作文集

第45回 「全日本中学生水の作文コンクール」三重県推薦分

目次

(掲載順は、各賞低学年から、学校名・氏名とも五十音順)

第45回全日本中学生水の作文コンクール	入選			
第20回琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール	流域賞			
僕の決意	高田中学校	一年	山中健資	1
第45回全日本中学生水の作文コンクール	佳作			
水を守る	高田中学校	一年	山城撫子	3
節水生活を通して見えたこと	高田中学校	二年	岩井優果	5
見学会で知った節水の大切さ	高田中学校	二年	吉岡紗希	7
水資源問題と水循環	皇學館中学校	三年	伊東亜里紗	9
第45回「全日本中学生水の作文コンクール」について	11

入選・流域賞

僕の決意

高田 中学校 一年 山中健資

「ちょっと誰かあ。シャワーのお湯が止まったんだけどー。」

お風呂から姉の声でした。

リビングでくつろいでいた母が見に立った。

「えっ、本当に水が止まっているよ。何が起こった？」
慌てた母の声で皆に緊張が走った。

二〇二三年一月二十五日。十年に一度と言われた最強寒波が日本列島に襲来した日だ。僕の住んでいるところは、霜が降りるのもひと冬に十回ちょっと、雪は数年ごとに何回か降る程度と、比較的温暖な町だ。ところがこの日は、後に聞いたところではマイナス八・七度まで気温が下がっていたらしい。そのためにマンションの北側に設置されている受水槽への流入管内で水が凍結し、夜に多くの家庭で水を使用するにつれて受水槽が空になったのだという。

さあ困った。幸い浴槽にお湯が張ってあったため、汲みだして使おうとしたが、シャワーに頼る生活になっているので、洗面器がない。台所のボウルを動員して入浴は済ませた。バケツに汲んで、トイレを流した。既に用意してあった食事を済ませたが、いつものように食器に盛りつけてあったため、まず汚れを紙で拭き取った。五人分の食器を拭き取るのに、多くの紙が必要で、ゴミ袋はあつという間にいっぱいになった。拭くために手を汚してしまい、水で洗わざるをえなくなった。洗剤を使わなくてすむものはスポンジですすいで終了。皿や箸は洗剤を使って洗い、ためすすぎをしてから、仕上げすすぎをした。皿をすすぐ母の動きに合わせて僕はペットボトルから水を流して手伝った。備蓄の水は限られているため無駄にはできない。すすぐ作業に合わせて二リットルのペットボ

トルの傾きを調整してチョロチョロと流し続けるのは、思っていたより大変だった。ずっしりと重かったペットボトルがだんだん軽くなっていく。楽になってきた、と思う一方で、使えば目に見えて減っていく様子にふと、水って有限なんだった、と思った。水がなくなっていくことに焦りを感じ、無駄にするまい、とペットボトルを支えなおした。

世界では、十分な水が得られる地域は多くないと聞く。安心安全な飲み水ともなると、さらに限定的だ。持続可能な開発目標 (SDGs) にも「安全な水とトイレを世界中に」とあるように、安全な水を手に入れるための取り組みが今、世界中で行われている。内戦が激化したスーダンもその地域の一つだ。退避が報道されるようになってはじめて、スーダンに多くの日本人がいることを僕は知り、その人たちの多くが、水や食糧、医療の支援に携わっていたことを学んだ。退避によって支援が滞るだけでなく、その支援によってこれまで届けられた水関連施設が、爆撃で破壊されたと聞く。生きるためにようやく手にした安心安全な水を、また人が奪っていく。過農耕や過放牧、過剰採取による砂

漠化も、地球温暖化も、人が後先考えずに行動した結果だ。これから何十年も先のことを考えて行動すべき時にきている。その時代を支えていくのは僕たちだ。幸い、家の断水は二日ほどで徐々に解消されていた。その後もしばらくは、「今、水を使っているのか」「水を使わずに乗り切る方法はないのか」と身構えてしまう習慣が残った。正しく節水できたのだろうか。手を洗う回数や洗濯を減らすのは衛生的にどうだっただろうか。食器を拭き取る作業のせいで紙ごみが山のように出たことや、皿を汚さないようにラップで覆うためにプラスチックごみが増えたのは、果たして正しいことだったか。僕の中にはモヤモヤが残った。蛇口から出る水は無敵ではない。譲り合って世界中で安心安全な水を飲めるよう、未来を見つめた行動をした



佳作

水を守る

高田中学校 一年 山城撫子

水は、生活にかかせないものです。飲み水、料理、洗濯、水洗トイレ、風呂など、多くのことに水を使います。日本人は、一日に一人あたり平均二一四リットル水を使っているそうです。世界で一人当たり一日に使う水の量は一八〇リットル。日本人は、世界でも多くの水を使っていることが分かります。それでも日本人の水の使用量は三二二リットルをピークに少しずつ減ってきています。これは、一人ひとりが節水を意識しているからだと考えられます。一人ひとりが水を大切にしようとしているのだと思います。

エジプト文明やインダス文明、メソポタミア文明などは大河の近くに栄えてきました。大河を利用して物を運んだり、農業用水として使ったりするためです。今から約五〇〇〇年前にも、水は生活にかかせないものだったので。こう考えると、人類は水があったこ

ことよって発展してきたと言っても過言ではないかもしれません。

平安時代。原始時代を除くと最も長かった時代です。平安京の主要道路であった大宮大路を横切るように延びる水路が二〇二二年に見つかりました。主要道路をさえぎるように水路があったということは、かなり重要な役割を果たしていたはずです。

そんな重要な役割を今も果たし続けている水ですが、今では汚染されてしまっているところもあります。その原因は、生活排水や産業排水にあります。つまり、水質汚染などの公害は人間が引き起こしたものだということです。

私は、水質汚染の原因となる生活排水を少しでも減らすために、普段から節水を心がけています。小学生のとき、誰も使っていないのに水が流れたままの水道

を見て「もったいないな」と思ったのがきっかけで節水を心がけるようになりました。家族からは、時々「節水、節水ってうるさい」と言われることがあります。でも、うるさいくらいが丁度良いと思うので、これからも続けていこうと思います。

私は「何てきれいな海なんだろう」と思ったことがあります。それは、志摩に行ったときのことです。砂浜にはゴミがなく、海水がすき通っていました。私の住んでいる場所の近くの海は、砂浜にはペットボトルやタバコが落ちていて、水もあまりきれいではありません。調べてみたところ、志摩市では科学者によって干潟の再生を行ったり、禁煙化を規定したりするなどの取り組みが行われていました。海をきれいにすることは、市や県だけの取り組みではできません。地元の人が条例を守り、水を守る活動をしていくことで初めて実現できると思います。多くの地元の人たちの手によって志摩の水は支えられています。

私は、美しい水を守っていくためには、一人ひとりの心がけがとても大切だと思いました。ポイ捨てをしない、水を出しっぱなしにしないなどの、小さな心

がけです。シャワーを一分流し続けると、約一〇リットルの水を使うそうです。つまり、日本の人々を一億人として一人ひとりが一分ずつシャワーを流す時間を短くすると、約一〇億リットルの水が使われずに済むということです。まさに「ちりも積もれば山となる」です。一人ひとりが気を付けるだけで、そんなにも結果は違ってくるのです。

私は、今後も節水やポイ捨てをしないなどの小さな努力を続けていきたいと思っています。これからは自分だけでなく周りの人にも小さな心がけで水を守っていくことができるのを知ってもらいたいです。



節水生活を通して見えたこと

高田 中学校 二年 岩井 優果

「うわあ!!!」

キッチンから声が聞こえた。ゴキブリが出たのかと思いは急いで向かった。するとそこには、流し台の扉を開けて中を覗いている母がいた。数日家を留守にしていた間に、流し台の下の排水パイプから水漏れしていたらしい。

ひとまず片付けを手伝った。が、どんなタイミングで漏れ出したか分からなかったたので、その日からキッチンで極力水を流さない、節水生活が始まった。

母が水漏れの箇所を特定した。流し台の真下、パイプのつなぎ目辺りから漏れていたらしい。受け皿を敷けば何とかかなりそうだったので、すぐに修理業者は呼ばずに、もうしばらく様子を見ることにした。

私はキッチンの水漏れについて検索してみた。すると、設備の故障だけでなく、ぬめりがパイプ内に溜ま

ることで管が細くなり、水の流れが悪くなることも原因の一つであることが分かった。このぬめりは、重曹とクエン酸を使うと簡単に除去できるらしい。私は早速、休日に試してみることにした。思っていたよりも使う粉の量が多くて驚いたが、排水口に重曹を振りかけ、お湯に溶かしたクエン酸を流しに入れると、シュワシュワと勢いよく発泡し出した。排水口の悪臭が強く臭ってきたので、何だか効果があるように感じた。最後に、見える部分をスポンジとブラシで洗い水を流すと、とてもきれいになっていた。

果たして漏れは解消したのか。結果は駄目だった。相変わらず、大量に水を流すとパイプのつなぎ目からポタポタと水がたれてきた。掃除をしても直らなかつたため、設備の老朽化であると判断した。

その後も節水生活は一ヶ月ほど続いた。この期間の

水道使用量の明細が届いたので見て驚いた。先月と比べて約一立方メートル、つまり千リットルも減っていたのだ。一日当たり約三十三リットル。二リットルのペットボトルに換算すると、十六本分にもなる。

母にこの一ヶ月間どんなことをしていたか聞いてみると、お米を無洗米にかえ、食器を洗う時には水を使うようにしていたらしい。

「今までは寒くてお湯を使っていたけど、少し暖かくなってきたから水にしたのよ」

我が家の給湯器は、ある程度水量を出さないとお湯が出ないのだ。

「普段から水を無駄使いしているつもりは無かったけれど、まだまだ節水できる事があったんだね」と二人で驚いていた。

母の行動によってどの程度節水できたのか計算してみた。無洗米にしたことでペットボトル二本分減らすことができた。三回の食器洗いで残りの十四本。つまり毎回九リットルほどの水を節水していたことになる。

その後、修理業者の人に来てもらい水漏れは無事に

直った。しかし、我が家は節水生活が習慣になったようだ。季節によって変動はするだろうが、今でも水の使用量は低く抑えられている。

私は今回のことを通して、小さな心がけを積み重ねていくうちに、とても大きな成果になることに気付いた。今まで何気なく使用していた水。これからは蛇口をひねる度に、「あと少し、出す量を減らして」と考えながら使っていこうと思う。



見学会で知った節水の大切さ

高田中学校 二年 吉岡 紗 希

私の家の近くには、配水場がある。幼かった私は、その特徴的な形状から、この施設が配水場であるとは知らずに「きのこ」と呼んでいた。ある日「きのこ」は何のためにあるのか気になり両親に聞いてみたことがある。すると、蛇口から出てくる前の綺麗な水を貯めておくためだ、と教えてくれた。その時おおよそは理解できたが、貯められている水はどこから来ているのかなど、疑問は残っていた。しかし、その時はこれらの疑問について聞いたり調べたりすることはなかった。

それからしばらく経った小学校四年生の夏に、市の水道施設の見学会が開かれることを知り、「きのこ」の正体を詳しく知るためにも、参加することにした。見学会では、水源となっている川、貯水池、浄水場と、川の水が飲み水になるまでの過程を実際に見ること

ができた。「きのこ」に関しては、なぜあのような形なのかということ、見学会で聞いた話で分かった。高低差を利用して遠い地域にまで水を届けるためだそう。配水場にこのような工夫をすることで、より多くの人々に水を届けることができるということを知った。たった一つの配水場にまでこのような工夫がされていることに驚いた。

見学会に参加して学んだことの中で、私が最も印象に残っているのが、貯水池から送られてきた水を綺麗な水にするまでに、予想以上に多くの作業が行われていたということである。普段、私達は何も考えずに蛇口から出る水を使っているが、その水がつくられるまでには、かなり多くの時間がかかっているのだ。私はこの時改めて、水は大切に使わなければならないと実感した。

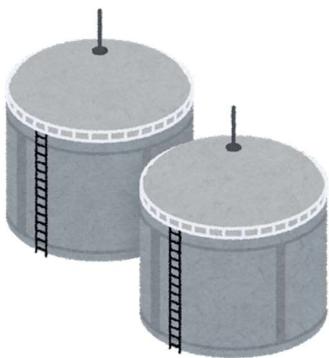
「節水」という言葉があるが、私も水の無駄遣いをあまりしないように心がけていたつもりではあった。しかし、ふと気がつくとき水を出しっぱなしにしていたこともあり、実際のところあまり徹底はしていなかった。そんな私も今では、水を使わない時は蛇口を閉めるなどといったことが自然とできるようになっていく。それは、水道施設の見学会に参加したことで、水の大切さを知ったと共に、節水の必要性を実感したからである。普段から水を大切にしないといわれても、水の大切さを知らなければ行動に移すことは難しい。

何事も、始めるには何かきっかけが必要なのだ。だから、多くの人が積極的に節水に取り組んでいけるようにするためには、私が参加した見学会のような、子供から大人までが水道水について学べる機会をもつと増やすべきだと思う。まずは水の大切さを知ってもらうところからだ。また、「節水」という言葉を知っているだけでなく、きちんと行動することが必要であることを知ってもらうべきだと思う。おそらく、節水を「知っている」人はたくさんいるだろう。近年、「節水」という言葉をあちこちで耳にするのが、その証拠であ

る。しかし、言葉は知っているけれど、実際はあまり心がけずに生活しているという人も少なくないと思う。「節水」という取り組みを知っているのならば、きちんと行動するところまでしなければ意味がない。節水を「している」人を増やすことが大切なのだ。

日本人一人あたりの水の使用量は一日約二三五リットルで、これは世界平均の約二倍である。世界中には水不足に苦しんでいる国も多くあるというのに、日本はこんな状態で良いのだろうか。水は誰もが毎日使うものだからこそ、それぞれの小さな意識の転換が大きな結果につながるはずである。

様々な工程を経て私達のもとへ届けられる大切な水。この水を大切に使用していきけるような、そんな社会を皆でつくっていききたいと思う。



佳作

水資源問題と水循環

皇學館 中学校 三年 伊東 亜里紗

先日、三重県環境学習情報センターの方の出前授業があり、「水」や「食品ロス」について学びました。その中で行った「水質チェック」の講座では、生徒が各々持ち寄った様々な水を比較しました。その結果、生活排水より川やドブから汲んだ水の方が綺麗だということにとっても衝撃を受けました。

家に帰り、さっそく家族に話したところ、「そんなの当然だよ。濃度が違うから生活排水のほうが汚い結果になるに決まっているよ」と、姉に一蹴されてしまいました。

確かに川の水は流れているし、大雨の後の川は水量が増し流れも速く、透明度も高いです。しかし、ドブのように滞留時間の長い所の水と比較しても、私たちが排出している水のほうが汚いというのは、やはり驚きです。

私は小学生の時、下水道処理施設の見学へ行ったことを思い出しました。そこでは汚れた水を幾つもの工程を経て綺麗な水にして、川へ流す施設だということ、水道の蛇口をひねると流れ出る水はとても貴重なものであること、水は命の源であることを学びました。さらに現代では、家庭に浄水器があり、浮遊物や不純物を取り除いてくれます。災害時、雨水や川の水を活性炭で綺麗にして飲料水を作る災害用品も思い浮かびました。

地球上の貴重な資源の一つである水を浄化する方法は、ほかにどんな方法があるのか、興味がわいたので調べてみました。

水の浄化には、主に三つの方法がありました。「物理学的処理」では、ろ過や沈殿、蒸発などの方法が用いられ、「化学的処理」では、酸化剤や消毒剤などの薬品

を使い水を浄化します。「生物学的処理」では、微生物を用いて有害物質を分解する方法がありました。

しかし、水の浄化にはコストがかかり、また大量の水を浄化するための浄水施設の整備、この水を届ける配管設備と高度な技術も必要になります。そのため、国の政策だけでなく、各企業においても様々な研究や活動、「森を育み、水を守る活動」がなされています。さらに水の研究所を自社に持つ会社があることも知りました。

世界が抱える水資源問題には、飲み水や保健衛生に関わるだけでなく、食料生産や工業生産、エネルギー問題や生態系など幅広い環境分野と密接に関わってくるのです。近代化・都市化による貯水池の消失や工業用水としての水需要の増加、人口増加、特に食料を増産するための水の使用量は、五十年前に比べて三倍にも増加しているそうです。

水が豊富な日本においても、昔は自然浄化できる範囲内の活動でしたが、現在はその範囲を超えてしまい、水資源問題として深刻な課題となってきているのです。

また地球上の水は、およそ四十億年前から総量はほとんど変わっておらず、絶えず循環し続けてきました。様々な用途に使用される水ですが、「水の惑星」と言われる地球でも水には限りがあることに改めて気づきました。

我が国においては、「健全な水循環の維持または回復」という目標を掲げ、平成二十六年に「水循環基本法」が制定され、「水」は国民供給の貴重な財産であり、公共性の高いものと位置づけられました。

私の住む日本は、水に恵まれている国の一つです。しかし、その恵まれた環境は決して努力なしでは守れないのです。水資源問題は国境を越えた問題でもあり、国際的な協力が不可欠です。

水資源の保全や暮らしの中での節水など、微力なことではありますが、その一つ一つの取り組みが、水を守る私たちに来ることであり、この恩恵に感謝するとともに、未来へも繋げていかなければならない、とても大切なことだと思いました。

第45回「全日本中学生水の作文コンクール」について

「水の週間」（8月1日～7日）行事の一環として実施された、第45回「全日本中学生水の作文コンクール」の概要は次のとおりです。

1 応募要領

- (1) 課題 「水について考える」（題名は自由）
- (2) 原稿枚数 400字詰原稿用紙4枚以内
- (3) 募集期間 令和5年1月11日～令和5年5月11日
- (4) 版权等
 - ・応募作品は自作未発表のものに限る。
 - ・応募作品の返却は行わない。
 - ・入選作品の著作権は主催者に帰属する。

2 地方審査

第45回「全日本中学生水の作文コンクール」審査基準に基づく審査により、優秀作文5編を決定しました。

審査員（4名）

- 三重県中学校国語教育研究会会員
- 三重県環境生活部大気・水環境課職員
- 三重県企業庁企業総務課職員
- 三重県地域連携・交通部水資源・地域プロジェクト課職員

3 三重県の応募状況

応募学校数	応募総数	学年別		
		1年生	2年生	3年生
6校	421名	227編	165編	29編

4 中央審査

各都道府県から推薦された優秀作文は、国土交通省におかれる中央審査会で審査され、最優秀賞1編、優秀賞10編、入選29編、佳作（最優秀賞、優秀賞、入選を除く作文）が決定されました。

5 主催・共催

- 主催 水循環政策本部、国土交通省、三重県
- 共催 琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会

6 その他

優秀作文5編については、「琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会」（構成団体：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）でも審査され、流域賞1編が決定されました。

